HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第7章 アイヌの人々のメディア環境とアイヌ語学習
Author(s)	小内, 純子
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 33, 125-140
Issue Date	2015-05-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59151
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_33_125-140.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第７章　アイヌの人々のメディア環境とアイヌ語学習

小内　純子｜札幌学院大学社会情報学部教授

はじめに

本研究グループでは、2012 年度の新ひだか町、2013 年度の伊達市に続き、2014 年度は白糠町でアイヌの方々の協力を得て調査を実施した。また、アイヌと北欧のサーミの比較研究のため、2012 年度にスウェーデンとノルウェー、2013 年度にノルウェー、2014 年度にフィンランドの調査を実施した。スウェーデンとノルウェーに関してはすでに報告書が上梓されている（小内 2013a, 2015a, 2015b）。本章は、筆者が担当する先住民族メディアに関する白糠調査の調査結果の報告である。北欧と日本の比較は別の機会に譲り、本章では主に白糠調査の結果を、これまでに実施した伊達調査（小内 2014）と新ひだか調査（小内 2013b）の結果と比較することを通じて、その特徴を明らかにする。

先住民族が自身のメディアを所有することの意義については、すでに小内（2013a）で論じた。ここで簡単に振り返ると、メディアを所有することにより、民族内部的には、民族としてのアイデンティティを確立し、民族としての誇りと自覚を芽生えさせ、民族としての共同行動を促すような力を持ちうる。また、外部的には、主流社会からは「見えない存在」であった先住民族の存在を可視化するという効果がある。主流メディアが流す先住民族についてのステレオタイプのイメージを正すことができるのは、やはり先住民族自身による情報発信であり、そのためには先住民族自身がメディアを所有することは重要である。

これまでの調査で、北欧のサーミと北海道のアイヌの人たちの間にメディア環境においてきわめて大きな格差があることが明らかになってきている。今年度の調査でもそうした傾向は看取されたが、北海道という地域に限定しても、アイヌの人々のメディア環境には地域差が存在している。その点を明らかにすることが本章の課題である。

以下では、まず、第１にアイヌ関連メディアの認知度と利用状況を見た上で、第２にメディアへの接触状況とメディアに対する評価について考察する。

第１節　アイヌ関連メディアの認知度と利用状況

第１項　アイヌタイムズとエフエム二風谷（ＦＭピパウシ）の認知度

小内（2013b）で指摘したように、2011 年にフィンランドセンター北海道事務所が主催した「サステナビリティ・ウィーク 2011　北海道－フィンランドデイズ」の「先住民族の言語：言語の継承と保護におけるメディアの役割と重要性」というセッションで、報告者の１人萱野志朗氏は、アイヌ民族自身が持つメディアとして「アイヌタイムズ」と「ＦＭピパウシ」（ミニＦＭ）の２つをとりあげている。これら２つのメディアが登場した背景と現在までの状況に関しては小内（2013b）で述べているのでそちらを参考にしてほしい。

今年度の白糠調査においても、これらのメディアがどのくらい認知され、活用されているのかという点に関して質問を試みた。表７－１は、「アイヌタイムズ」に関する認知度について、白糠町と新ひだか町と伊達市の３つの地域の調査結果を示したものである。白糠町での調査結果は、購読している人は皆無で、「アイヌタイムズを知らない」という人が48人中38人と約８割を占めており、やはり他の２つの地域と同様に認知度は低い水準に留まっている。ただし、他の２地域では「知らない」という人が９割を超えているのに比べると、知らない人の比率は低い。実際、「読んだことがある」という人は２人、「知っているが読んだことはない」という人が７人となっている。読んだことがあるかどうかは別にして、アイヌタイムズの存在を知っているという人が白糠町には18.8％おり、伊達市の4.3％、新ひだか町の7.0％に比べると高くなっている。

表７－１　アイヌタイムズの認知状況

	白糠町		伊達市		新ひだか町	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
購読して、読んでいる	0	0.0	0	0.0	1	1.8
購読しているが、読んでいない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
購読していないが、読んだことはある	2	4.2	2	4.3	2	3.5
アイヌタイムズは知っているが、読んだことはない	7	14.6	0	0.0	2	3.5
アイヌタイムズがあることを知らない	38	79.2	44	93.6	52	91.2
はっきりしない	1	2.1	1	2.1	0	0.0
計	48	100.0	47	100.0	57	100.0

資料：インタビュー調査より作成

また、「読んだことがある」という２人が、読んでみての感想を次のように述べている。１人は50代の女性で、「アイヌタイムズを読んだことがあるが、アイヌ語が難しすぎて読めなかった。」という。彼女は、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が行うアイヌ語上級講座や口承文芸伝承者（語り部）育成講座やラジオ講座でアイヌ語を学んできた人である。もう１人は60代の女性で、彼女もアイヌ語講座やアイヌ語のテープを聴いて学習に取り組んできている人である。その彼女も、「アイヌタイムズは一度、友人に見せてもらって読んだけれど、難しく、一回一回辞書で調べなければならないため読んでいない。」と答えている。ある程度、アイヌ語を学習してきた層にとってもアイヌタイムズはかなり高度な内容であることがわかる[1)]。いずれにせよこのようにアイヌタイムズについて具体的な感想を聞くことができたのは今回が初めてであった。こうした点からも、これまでの２地域に比べると、相対的にアイヌタイムズの認知度は高いことがわかる。

第２項　ミニＦＭ放送局「ＦＭピパウシ」の認知度

一方、「ＦＭピパウシ」の認知度について３地域を比較したのが表７－２である。「ラジオ放送を聞いたことがある」という人は白糠町は皆無であった。これはミニＦＭ放送であるため、白糠町では普通のラジオ受信機では受信できず、インターネットラジオで聴取するしかないことが影響していると思われる。伊達調査と新ひだか調査では「聞いたことがある」という人が１人ずついるが、その場合も１回限りである。したがって、３地域とも「FM ピパウシ」のラジオ放送はほとんど聞かれていないということになる。これに対して、「聞いたことはないがFM ピパウシの存在は知っている」という人が、白糠町には10人、20.8％存在しており、新ひだか町40.4％と伊達市8.5％の

中間に位置している。逆に「知らない」という人は、伊達市が最も多く89.4％、白糠町が79.2％、新ひだか町が57.8％という結果となっている。新ひだか町に比べると、白糠町では「ＦＭピパウシ」の認知度は低く、どちらかというと伊達市に近い傾向にある。これは「ＦＭピパウシ」が日高管内の平取町にあるため、新聞やテレビの地域枠で取り上げられる機会が多く、結果として新ひだか町での認知度が高くなっているものと考えられる。白糠町で「知っている」と答えた11人のうち６人が知ったきっかけを答えているが、５人は「人を介して」で、残り１人はテレビのニュースで知ったということである。白糠町のアイヌの人たちが「ＦＭピパウシ」の存在を知るきっかけはマスメディアではなく、口コミ情報によっていることがわかる。

表７－２　ＦＭピパウシの認知状況

	白糠町		伊達市		新ひだか町	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
放送を聞いたことがある	0	0.0	1	2.1	1	1.8
知っているが聞いたことがない	10	20.8	4	8.5	23	40.4
知らない	38	79.2	42	89.4	33	57.9
計	48	100.0	47	100.0	57	100.0

資料：インタビュー調査より作成

このように白糠調査では、①「アイヌタイムズ」の認知度が他の２地域に比べて５％から10％程度高いこと、②「FM ピパウシ」の認知度は低く、新ひだか町と伊達市の中間に位置するがどちらかというと伊達市に近い傾向にあることなどが、特徴点として浮かび上がる。

第２節　アイヌ語ラジオ講座とアイヌ語教室

第１項　アイヌ語ラジオ講座の認知度と利用状況

メディアとアイヌ民族を結びつけるものとして、もう１つアイヌ語のラジオ講座がある。これはSTV ラジオにおいて1998年４月からスタートしており、現在も、週１回、毎週日曜日７:00 ～７:15（再放送：毎週土曜日23：00 ～ 23：15）に放送されている。アイヌ文化振興・研究推進機構の事業の１つである（小内　2014)。表７－３は、ラジオ講座の認知度に関する白糠調査と伊達調査の結果を比較したものである（新ひだか調査にはこの調査項目が含まれていなかった)。そこから白糠町の方がアイヌ語講座の認知度が高いことがわかる。ラジオ講座を「聞いたことがある」人と「知っているが聞いたことがない」人を合わせると、白糠調査では79.2％になるのに対して、伊達調査では48.9％にとどまり、両地域の間にかなり大きな差が存在している。

また、「聞いたことがある」という中身も伊達調査とは異なる特徴が見られた。伊達調査では、聞いたことがあるという人のほとんどは、仕事（とくに漁業関係）をしている時や運転中に耳にしたという「偶然的聴取者」であるのに対して、白糠町の場合は、聞こうとして聞いたという「意識的聴取者」が少なからず存在しているのである。白糠調査では、「現在聞いている」という人が５人、「過去に聞いていた」という人が３人存在している。これら「意識的聴取者」たちはラジオ講座の受講について以下のように述べている。

表７－３　ラジオのアイヌ語講座の認知度

			年齢層			性別		計
			青年	壮年	老年	男	女	
白糠町	実数	聞いたことがある	9	12	21	9	12	21
		知っているが聞いたことはない	4	13	17	4	13	17
		知らない	2	8	10	2	8	10
		計	15	33	48	15	33	48
	比率	聞いたことがある	60.0	36.4	43.8	60.0	36.4	43.8
		知っているが聞いたことはない	26.7	39.4	35.4	26.7	39.4	35.4
		知らない	13.3	24.2	20.8	13.3	24.2	20.8
		計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
伊達市	実数	聞いたことがある	5	5	6	7	9	16
		知っているが聞いたことはない	1	4	2	2	5	7
		知らない	3	11	10	5	19	24
		計	9	20	18	14	33	47
	比率	聞いたことがある	55.6	25.0	33.3	50.0	27.3	34.0
		知っているが聞いたことはない	11.1	20.0	11.1	14.3	15.2	14.9
		知らない	33.3	55.0	55.6	35.7	57.6	51.1
		計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

資料：インタビュー調査より作成

（１）現在聞いている人

①「アイヌ語ラジオ講座は始まった当時から知ってますよ。夜の放送を聞くことの方が多いですね」（女性、60 代）。

②「最初の頃から聞いている。アイヌ語は残せるものであれば残していきたいし、いま講座をやっている先生方が一生懸命で素晴らしいなと思う。」（女性、80 代）。

③「時々聞いている。身内が 10 年以上前に講師をしていたことがあり、その時は本人から直接聞いたこともある。今も時々聞くが、とても難しいアイヌ語講座もあり、その必要性に疑問を持つこともある。」（女性、60 代）。

④「アイヌ語講座は日曜日に家にいる時は毎回聞いているし面白い。それで、頭のことを“パケ”というなど単語をいくつか知っている。」（男性、60 代）。

⑤「十数年前の放送開始当初からたまに聞いている。身内がアイヌ語の先生でこの講座にも出演していた。」（男性、60 代）。

（２）過去に聞いていた人

①「アイヌ語教室の助手をやり始めた 10 年程前から、助手をするための勉強として聞き始めた。助手をしていた７～８年間はラジオ講座を聞いていた」（女性、50 代）。

②「今は聞いていないが、10 年くらい前に聞いていた。夫が、船で、朝早いラジオ講座を聞いていて、私にもその再放送を聞くようにと言うので。」（女性、60 代）。

③「以前聞いていたことがある。朝が早いので聞き続けてはいない」（女性、50 代）。

また、表７－３に明らかなように、「聞いたことがある」という人（＝偶然的聴取者＋意識的聴取者）で見ると、年齢層では青年（30 歳未満）、性別では男性で高くなっているが、「意識的聴取者」

に限定すると50､60代の女性に多いことがわかる。また､「意識的聴取者」のラジオ講座を聞くきっかけを見ると、身近な人がラジオ講座の講師を務めていたことをあげる人が複数いることに気づく。これは白糠町出身の高木喜久恵が2000年と2002年にラジオ講座の講師を務めていたことを指している。1947年に白糠町で生まれた高木は、20歳頃に阿寒湖畔で夏に働いたことをきっかけにアイヌ文化に目覚め、アイヌ文化の伝承に熱心だった母の影響もあって、次第にアイヌ民族舞踊やアイヌ語に興味を持つようになる。アイヌ語は1991年に白糠支部で始まったアイヌ語教室において増田光教講師[2)]の下で本格的に学び始め､２年目からはアイヌ語教室の助手を務めるようになる。1996年からは自身がアイヌ語教室の講師となり、2000年のラジオ講座の講師への抜擢につながっていく。高木は、こうした功績が評価されて、2014年度第18回アイヌ文化奨励賞（個人）を受賞している[3)]。

今回の調査には、高木と親族関係にある人が何人か含まれていたことが調査結果に影響を与えた面もあるが、やはり地元にラジオ講座の講師が存在することの意味は小さくなく、そのことが白糠町におけるラジオ講座の認知度や利用率をあげている面があることは間違いない。

第２項　白糠アイヌ語教室の活動と参加状況

もう１つラジオ講座の認知度や利用率を押し上げている要因として白糠アイヌ語教室の存在がある。白糠アイヌ語教室は1991年に設立されて以降、毎月２回、白糠生活館において開催されてきている。初代の代表者で講師を務めたのが増野光教で、講師は1996年から高木喜久恵に引き継がれている。増野光教は、1926年に白糠町で生まれたが、生後間もなく和人養子としてアイヌ夫婦に引き取られている。幼少時に養父母を相次いで亡くし養祖母に育てられたという経験を持つ。それゆえアイヌ語を身近に聞きながら育っている。その経験が後に増野をアイヌ文化研究、とくにアイヌ語の白糠方言の研究に向かわせることになる。白糠のアイヌ語教育の第一人者であり、高木の師匠でもある。この白糠アイヌ語教室は、2006年度アイヌ文化奨励賞（団体）を受賞している。

また、アイヌ文化振興・研究推進機構が行うアイヌ語教育事業として「アイヌ語上級講座」と「親と子のアイヌ語教室」、アイヌ文化伝承再生事業として「口承文芸伝承者（語り部）育成」の取り組みが、それぞれ白糠生活館で行われている[4)]。2011年度のアイヌ文化振興・研究推進機構『事業報告書』によれば、この年の講座は以下の要領で行われている。まず、集中講義方式で行われる「上級講座」は、全国６地区（東京、札幌、平取、むかわ、白糠、白老）で行われ、白糠町では白糠生活館で、７月５日～９月21日の期間中に12日間で計36時間の講座が開講された。藤村久和講師の下で、受講者５人が学んでいる。「親と子のアイヌ語教室」は親子を対象に平易な日常会話を学ぶために開催されるもので、この年は６地区（東京、札幌、平取、白糠、阿寒、白老）で行われている。白糠町では、６月２日～11月８日の期間中に　24日間で計48時間の講座が開講された。講師は高木喜久恵で、受講者は３家族８人であった。また、「口承文芸伝承者（語り部）育成」事業は全道８地区（むかわ、平取、白糠、旭川、浦河、札幌、阿寒、帯広）で実施され、白糠町では６月18日～12月10日の期間中に15日間44時間実施されている。解説指導者は田村雅史、伝承補助者は高木喜久恵が務め、５人が受講している。なお、開催地は年によって若干異なり、2012年度は、「上級講座」は浦河町が加わり７地区に、「親と子のアイヌ語教室」は白糠町に替わってむかわ町で実施されている。

このようにアイヌ協会白糠支部（現 白糠アイヌ協会）では、アイヌ語講座や語り部育成事業の開催などに積極的に取り組んできている。その結果、調査対象者のなかに、アイヌ語教室等に参加した経験を持つ者が多い。これまでに受講経験がある人は 48 人中 28 人と約６割に達し、現在も受講している人が 10 人（20.8％）となっている。ラジオのアイヌ語講座受講者をはるかに上回る数である。表７－４は、これまでにアイヌ語教室等に参加経験がある人について見たものである。年齢層別には壮年層（58.3％）と老年層（54.2％）、性別では女性（51.5％）に多くなっている。表７－５は、現在受講している 10 人について見たものである。こちらは全員が女性であり、年齢層的には老年層（５人）と壮年層（３人）に多いが、青年層にも２人いる。

表７－４　アイヌ語教室等に参加した経験について（年齢層別、性別）

	実　数（人）			比　率（％）		
	経験あり	経験なし	計	経験あり	経験なし	計
青年	4	11	15	26.7	73.3	100.0
壮年	7	5	12	58.3	41.7	100.0
老年	11	10	21	52.4	47.6	100.0
計	22	26	48	45.8	54.2	100.0
男	3	12	15	20.0	80.0	100.0
女	17	16	33	51.5	48.5	100.0
計	20	28	48	41.7	58.3	100.0

表７－５　現在アイヌ語教室に参加しているか（年齢層別、性別）

	実　数（人）			比　率（％）		
	参加	不参加	計	参加	不参加	計
青年	2	13	15	13.3	86.7	100.0
壮年	3	9	12	25.0	75.0	100.0
老年	5	16	21	23.8	76.2	100.0
計	10	38	48	20.8	79.2	100.0
男	0	15	15	0.0	100.0	100.0
女	10	23	33	30.3	69.7	100.0
計	10	38	48	20.8	79.2	100.0

アイヌ語教室等への参加経験者の感想からその実態が垣間見られる。

①「アイヌ語講座で勉強している。アイヌ語で話してみれと言われたら、作文くらいなら作れる。」（女性、60 代）

②「アイヌ語学習として白糠生活館での講習がある。白糠では語り部という育成事業がある。講師の先生からベカンベ（菱の実）などアイヌの食べ物について習ったり、ユーカラをアイヌ語で書いて、その意味をクイズにしたり、作文を習ったりしている。それがすごく楽しい。」（女性、60 代）

③「長女はアイヌ語を熱心に勉強している。白糠の生活館でやっている親子で学ぶアイヌ語講座にも参加したことがある。このアイヌ語講座は全員アイヌの血筋を持った人たちを対象に３～４家族位に講座が開講されている。」（女性、30 代）

④「白糠の生活館でやっているアイヌ語の講座に参加しているがなかなか難しい。何年目だろう、３年目かな。でも、なかなか難しいんですよ。」（女性、30 代）

⑤「アイヌの語り部で現在アイヌ語の学習をしており、今年で５年目である」（60 代、女性）

⑥「ラジオ講座以外のアイヌ語学習は、白糠アイヌ協会の上級講座に通っている。上級講座を 7,

8年くらい受けているかな。」（50代、女性）

⑦「ラジオ講座は聞いたり聞かなかったりしてます。アイヌ語、私はいま藤村先生が講師の上級講座を習っています。ラジオ講座で聞くより藤村先生のやっている講座の方が私としてはわかりやすい。」（女性、60代）

なお、アイヌ語の学習をしているからこその批判や要望も出ている。たとえば、「とても難しいアイヌ語講座もあり、その必要性に疑問を持つこともある。もっと簡単な物語やユーカラのようなもので楽しく聞ける方が良いのではないかと思う」（女性、60代）、「10年以上前に年に２～３回だけアイヌ語講座に通ったことがある。ただ、アイヌ語講座をやる意味はどこにあるのかと思う。アイヌ語を実際に使う場所がない。」（女性　60代）というものである。現代社会においてアイヌ語を学ぶ目的をどこに置くかということに関わる問題提起といえよう。

以上から、白糠町においてラジオ講座はあくまでもアイヌ語学習の補助的な役割を担うものであることがわかる。アイヌ語学習の中心は、白糠生活館で開催されるアイヌ語教室等への参加であり、そのなかからラジオ講座を意識的に受講する人が生まれてきているのである。

第３節　メディアへの接触状況と北海道新聞地方版“ピヤラ”

第１項　メディアへの接触状況

さて、これまでの分析から、「アイヌタイムズ」や「ＦＭピパウシ」といったアイヌ民族自身がもつメディアは、必ずしもアイヌ民族内部で十分な影響力を持つまでには至っていないことがわかる。また、ラジオ講座の利用者も決して多くはない。このような状況のなかで、白糠町のアイヌの人々は、アイヌ民族に関する情報をどのように得ているのであろうか。調査では、「あなたがアイヌ関係の情報を最も多く得ているメディアはどれですか」（複数回答）と質問している。その結果を示したのが表７－６である。新聞がもっとも多く23人（48.9％）、テレビが22人（46.8％）で、この２つのマスメディアに集中している。ついでアイヌ協会の機関紙「先駆者の集い」をあげるものが10人（21.3％）と続く。その一方で、「とくにない」という人が５人（10.6％）存在している。「先駆者の集い」は日本語表記であるが、アイヌ民族が持つメディアの１つであり、「アイヌタイムズ」や「ＦＭピパウシ」に比べると利用率が高いことがわかる。

表７－６　アイヌ関係の情報を得るメディア（ＭＡ）　　人／％

	白糠町		伊達市	
	実数	比率	実数	比率
テレビ	22	46.8	24	51.1
新聞	23	48.9	13	27.7
ラジオ	2	4.3	2	4.3
先駆者の集い	10	21.3	8	17.0
アイヌタイムズ	0	0.0	0	0.0
ピパウシ	0	0.0	0	0.0
その他	10	21.3	7	14.9
とくにない	5	10.6	11	23.4
回答者数	47		47	

注）白糠町では無回答１人。
資料：インタビュー調査より作成。

伊達調査の結果と比較すると、１つに、白糠調査では新聞をあげるものが伊達調査に比べて多いことがあげられる。白糠町の 48.9％に対して、伊達市は 27.7％にとどまる。２つ目に、情報を得ているメディアは「とくにない」とする人が、白糠町 10.6％、伊達市 23.4％と、白糠町では１割程度となっている。白糠町のアイヌの人たちの方がアイヌ民族の情報に関心を持っていることがわかる。

新聞をあげる人が白糠町に多いのはなぜであろうか。新聞から情報を得ていると答えてくれた人のうち購読している新聞名を回答してくれた人の結果は、北海道新聞 11 人、釧路新聞４人となっている。北海道新聞を情報源にしている人が多いが、なかでも１ヵ月１回掲載される「ピヤラ　アイヌ民族の今」という記事について言及する人が４人いた。ピヤラとはアイヌ語で「窓」という意味である。たとえば、「北海道新聞から主に情報を得ている。釧路･根室版のピヤラなどをよく読む」（女性　60 代）、「購読している新聞は北海道新聞。ピヤラという道東版のコーナーがあり、１か月に１回、火曜日に発行されている。これをファイリングしている。」（女性　50 代）と述べている。したがって、伊達調査に比較して白糠調査で新聞をあげる人が多いのは、北海道新聞の釧路・根室版においてアイヌ民族関連の記事が相対的に充実していることが１つの要因となっていると考えられる。

第２項　北海道新聞釧路・根室版“ピヤラ”

簡単に“ピヤラ”について見ておこう。ピヤラは、「アイヌ民族の今」という副題をもち、北海道新聞の釧路・根室版に月１回火曜日に掲載されている 1,200 ～ 1,500 字程度の記事である。表７－７に、「どうしんウェブ」版に掲載されている 2013 年 12 月～ 2015 年３月までの記事のタイトル一覧を示した[5)]。釧路地方のアイヌ民族に関わる様々な事柄が記事として取り上げられている。このうち本稿に関係がある２つの記事を紹介しておく。

１つは、2014 年８月 12 日に掲載された「白糠のアイヌ民族　台湾先住民族と絆確認」という記

表７－７　北海道新聞「ピヤラ　アイヌ民族の今」の見出し一覧

発行年月日	記事の見出し
2013/12/10	釧路アイヌ語の会　市民が熱心に文化伝承
2014/1/14	阿寒湖温泉の千家盛雄さん　松浦武四郎とアイヌ民族語る
2014/2/18	阿寒湖アイヌシアター「イコㇿ」 小中高生、学習の場に
2014/3/11	標茶コタンをモデルに書いた父の物語 「シワンプトの人々」１冊に
2014/4/8	旧太田村（厚岸町）の基礎築いた太田紋助　アイヌ民族、地位向上に力
2014/5/13	人形劇で世界観表現　阿寒湖アイヌシアター、来春から新作上演
2014/6/10	クナシリ・メナシの戦い、多数の犠牲者　苦難の歴史に思いはせ
2014/7/15	古式舞踊／ムックリ演奏／料理…　アイヌ文化体験学習
2014/8/12	白糠のアイヌ民族　台湾先住民族と絆確認
2014/9/9	北大に残る２体の遺骨 「故郷で眠ってほしい」返還願う釧路アイヌ協会
2014/10/14	阿寒湖でアイヌ文化体感 「ガイドのお店　イ・モシリ」がツアー
2014/11/11	木が宿す時間と命、形に　床ヌプリさんが残した作品
2014/12/9	アイヌ語の意味が分かれば納得！　地形表す難読地名
2015/1/13	アイヌ文様、装身具多彩に　ジュエリー作家下倉さん工房開設
2015/2/10	アイヌ語、各地に方言　道内、北千島、サハリンなどで違い
2015/3/10	アイヌ文化企業がＰＲ

資料：「どうしん」web 版（http://dd.hokkaido-np.co.jp）

事である。白糠町のアイヌ民族と台湾の先住民族タイヤル族との交流は、2011年に始まっており、2014年７月に白糠アイヌ協会の関係者ら８名が２回目の訪問を行った様子を伝えている。今回訪れた台湾北部の烏来区は、人口6,000人で、その大半がタイヤル族によって占められている地域である。両民族はともに狩猟・採集民族であり、文化面でも類似する点が多いという。現地での交流を通じて、「タイヤル族も結婚や就職などの際に差別を受けることもあり、独自の言葉や文化を受け継ぐ難しさもあることを知ったという。ただ、台湾の先住民族への保護政策は手厚く、タイヤル族は大学進学で優遇されているほか、学校ではタイヤル語を教え、専門のテレビ局[6)]まである。」という現状が紹介されている。こうした交流は、白糠町のアイヌ民族がおかれた状況を相対化することを可能にしていると思われる。

もう１つは、2013年12月10日に、「釧路アイヌ語の会　市民が熱心に文化伝承」というタイトルで「釧路アイヌ語の会」が紹介された記事である。同会は、釧路管内でも珍しい一般市民によるアイヌ語の自主学習団体として1996年から活動を継続してきている団体である。会員は12名で、月２回の例会が釧路図書館で開催されており、熱心にアイヌ語を学ぶ様子が紹介されている。その中に、アイヌ語ラジオ講座などを活用して学んでいること、語彙を増やすためにアイヌ語新聞「アイヌタイムズ」を用いていることが書かれており、アイヌ語教室とラジオ講座や「アイヌタイムズ」の関わり方の一例を教えてくれる。

このようにピヤラは、アイヌ民族に関するいろいろな出来事を取り上げることで、アイヌの人々から一定の支持を得ている。実際、先に見たようにピヤラの記事を毎週切り取って保存している人がいたり、「ピヤラは釧路地方でしかやってないので、札幌の方でもやって多くの人に知ってほしい」（女性　60代）と述べる人もいる。マスメディアが発信する情報であってもアイヌ民族の支持を得ることに成功している例とみることができる。

第４節　報道姿勢と情報発信

第１項　マスメディアの報道姿勢に対する評価

先に見たように白糠町のアイヌの人たちがアイヌ関連の情報を主に得ているのは新聞とテレビであった。そこで本調査では、「新聞やテレビなどマスメディアによるアイヌ民族の取り上げ方について、常日頃感じていることがあればお教え下さい」という質問を行った。回答がない８人を除く40人中16人（40.0％）は「考えたことはない」「とくにない」と答えている。残り24人のうち、「今の取り上げ方で十分である」「マスコミも頑張っている」という肯定的に評価する人は６人であった。また、報道する側ではなく、「社会がアイヌを受け入れるようになってきている」（女性、40代）というように社会の側の変化を指摘する人もいる。たしかに、この数年の世論の側の変化には目を見張るものがある。そうした状況を見て、「あまり騒ぎ立てないでほしい。アイヌ民族を優先することで、アイヌ民族ではない人たちから、『なんでアイヌばっかり』と思ってしまう人が出てくると考える。」という意見も出された。ただし、新ひだか調査に多数見られた「テレビでアイヌって言葉を流してほしくない」、「アイヌやウタリという言葉を聞くとガーンとくる」といった視点から否定的な意見を述べる人は皆無で、この点では白糠調査と伊達調査は共通していた。このことは地域差なのか、この２年の間の世論の変化の影響なのかは明らかにすることはできなかったが、２つの要因の相乗効果とみることが妥当なのかもしれない。

一方、マスコミの報道姿勢に対する批判的意見としては以下のようなものが出された。1つは、「もう少し前からちゃんとアイヌ文化を認めてほしかった。日本はオリンピックがあるからアイヌの事を見直すというようなことを言っているが、遅いと思っている。」（女性、20代）という「評価する時期の遅さ」に不満を述べる者が2人いる。さらに、「アイヌ文化はもっとテレビなどで取り上げられるべきだと思う。今は少なすぎる。そうすればアイヌの気持ちがわかるはず。」（女性、60代）というように、「取り上げる機会の少なさ」を問題にする人が5人いる。

また、「何かバカかにしたような言い方をしていると感じることがあり、腹が立つことがある。」（男性、70代）という人が2人、「アイヌ民族からいえば、何の勉強もせず、本州から来てアイヌのことを語るんじゃないよ、何がわかっているんだ、と思う。」（女性、60代）という意見を述べる人が3人いる。アイヌ民族に対する理解不足への不満の声である。

さらに、ステレオタイプの報道に対する批判の声もある。「美化されすぎではないか。つねにカムイ、自然など、良いことばかり伝えられるが、それだけではないだろう。昔の戦いの話も、つねにアイヌが被害者のようだが、アイヌの中にも強い人や弱い人などいろいろな人がいるはず。」（男性、20代）、「大袈裟な気がする。神々がどうだとか、こうだとかって言って。そんな大袈裟なものじゃないよ。」（女性、30代）、という意見である。「アイヌ民族＝自然、カムイ」ということが、今の時代のなかで利用されてしまっている面もあり、そのことに対する不快感の表れとみることができる。

さらに、「子どもが見る時間帯に放送し、子ども向けの働きかけをしてほしい。子どもから教えないと覚えない。文化保存なんかも小さいうちから習ったものはしっかり覚える。」という積極的な提言も聞かれた。

第2項　アイヌ民族自身による情報発信の必要性について

次に、「アイヌ民族自身による情報発信は必要だと思いますか」という点について尋ねた。「わからない」「考えたことがない」という6人を除き42人中33人（78.6％）が「必要」と答えており、「必要ではない」とする9人（21.4％）を大きく上回っている。「必要」という人は、新ひだか調査では皆無、伊達調査では42人中24人（55.8％）であったから、白糠町では「必要」とする人が非常に多いという結果となった。

しかも積極的な意見を述べる人が多い。「必要だと思う。アイヌであるということが恥ずかしいことではないということを子どもたちに教えて自信を持ってもらえるようにしたい。」（女性、60代）、「必要だと思う。上の人に任せておいても、底辺の人たちの声が届いていない。我々の声がもっと届くようにしてほしい。意見交換のできる場を提供してほしい。」（女性、50代）、「アイヌ民族自身がアイヌ文化についての情報を発信すべきである。アイヌには和人に対する遠慮がある。自分がアイヌであることを悲観的に思っているように感じている。そういう傾向をなくしていけたらいいと思っている。」（男性、60代）、「必要だと感じている。アイヌ民族のこと知らない人がたくさんおり、間違った考え方をされている人もたくさんいるためである。『アイヌ民族はいるんだよ』ということをわかってもらって間違った考え方を直して、わかってもらいたい」（女性、50代）という意見である。最後の意見は、われわれが調査を行った2014年9月の直前に、札幌市の金子市議が「アイヌ民族はもういない」という発言をしたことを意識してのものとみることができる。

おわりに

以上、白糠調査の結果を、伊達調査と新ひだか調査の結果と比較しながら見てきた。そこには明らかに地域差が見てとれた。最後に地域差について改めて確認しておきたい。

第１に、アイヌタイムズとＦＭピパウシの認知度は、残念ながら高くはない。白糠調査におけるアイヌタイムズの認知度は 18.8％、ＦＭピパウシの認知度は 20.8％にとどまった。ＦＭピパウシの認知度は、放送局がある平取町と同じ日高管内の新ひだか町では 42.2％に達していたが、その情報は平取町から距離がある白糠町にまでは届いていないのである。この点では伊達市に近い傾向を示している。また、アイヌタイムズに関しては、存在を知らない人が、伊達市や新ひだか町では 90％を超えているのに比べると、白糠町では相対的には知っている人が多いという特徴があった。その理由の１つに、白糠町が他の２地域に比べるとアイヌ語に親しんできたという点があげられる。

第２に、その点はアイヌ語のラジオ講座の認知度の高さにも表れている。伊達市の認知度が 48.9％であるのに対して、白糠町は 79.2％と２つの地域の間に大きな差が存在している。しかも単に認知しているだけではなく、実際に意識的にラジオ講座を聞いている「意識的聴取者」が少なからず存在している点も特徴的である。その理由の１つは、白糠町在住の人がラジオ講座の講師を務めた期間があったことにある。もう１つは、ラジオ講座開始以前から白糠生活館で開催されるアイヌ語教室等に参加している人が多かったことによる。アイヌ語教室等の講座に参加したことがある人が 48 人中 28 人と約６割に達している。ラジオ講座の講師を務めた女性は、白糠生活館で行われるアイヌ語教室の講師を務めていた人でもある。したがって、この点は増野光教エカシを嚆矢としてアイヌ語教育に積極的に取り組んできた白糠アイヌ協会の活動を基盤として表れている特徴といえる。

第３に、それだけにアイヌ語を学ぶことに対する疑問の声が寄せられていることも他の地域にない点である。アイヌタイムズに関しては「難しすぎる」という意見、アイヌ語教室についても、「難しすぎる講座があり、その必要性に疑問を感じる」、「実際にアイヌ語を使う場所がないのにアイヌ語講座で学ぶ意味がどこにあるのか」といった意見である。現代社会において何のためにアイヌ語を学ぶのかという、つまりアイヌ語を学ぶ意義が改めて問われているのである。

第４に、アイヌ民族自身がもつメディアが十分に認知されていないなかで、アイヌ民族に関わる情報は主に新聞とテレビから得ているという結果になった。とくに、伊達調査に比較して新聞から情報を得ていると答える人が多いという特徴が見られる。その要因の１つは、北海道新聞の釧路・根室版に月１回掲載される“ピヤラ”の存在が指摘できる。マスメディアではあるが、アイヌ民族の立場に立って丁寧に報道することで、一定の信頼を得ていることがわかる。

第５に、そうした影響もあって、マスメディアの現在の報道姿勢に対して問題点を指摘する声は半数弱にとどまる。「考えたことがない」「今のままでよい」という回答が 55.0％を占めている。ただし、伊達市に比べると問題点を指摘する声ははるかに多く、その点では新ひだか町に近い傾向がある。問題点としては、「アイヌ文化に注目するのが遅い」、「もっとたくさんとりあげてほしい」、「ばかにしている言い方に感じることがある」という非難のほか、「美化されすぎている」、「大袈裟な気がする」といったステレオタイプの報道に対する批判の声もある。さらに少数意見として、「子どもがみる時間帯にしてほしい」という提案型の意見も存在した。北欧は子ども番組に非常に力を入れており（小内 2015a）、その点からみてもこれは重要な指摘と思われる。

第６に、アイヌ民族による情報発信については、新ひだか調査や伊達調査に比較して、積極的にその必要性を述べる人が多いという特徴が見られた。これは、これまでアイヌ語などを積極的に学んできたことによって培われてきたアイヌ文化に対する自信の表れと考えられる。ただし、自分が情報発信の担い手になるという意識はほとんどなく、その点は他の２つの地域と共通する状況であった。白糠のアイヌ民族が台湾の先住民族タイヤル族との交流を続けるなかで、タイヤル族がすでに専門のテレビ局を持っているという事実を知るようになってきている。そうした経験を通じて、先住民族自身がメディアを持ち、自ら情報発信していくことの意義が少しずつ理解されていくことを期待したい。

以上、これまで３つの地域の調査を行ってきたが、それぞれが独自の歴史を積み上げてきており、ひとくちにアイヌ民族といってもおかれた状況は一様でないことが明らかとなった。それゆえこうした違いに配慮した対策が取られる必要があることがわかる。

補論　北海道新聞に見るアイヌ関連記事の変遷

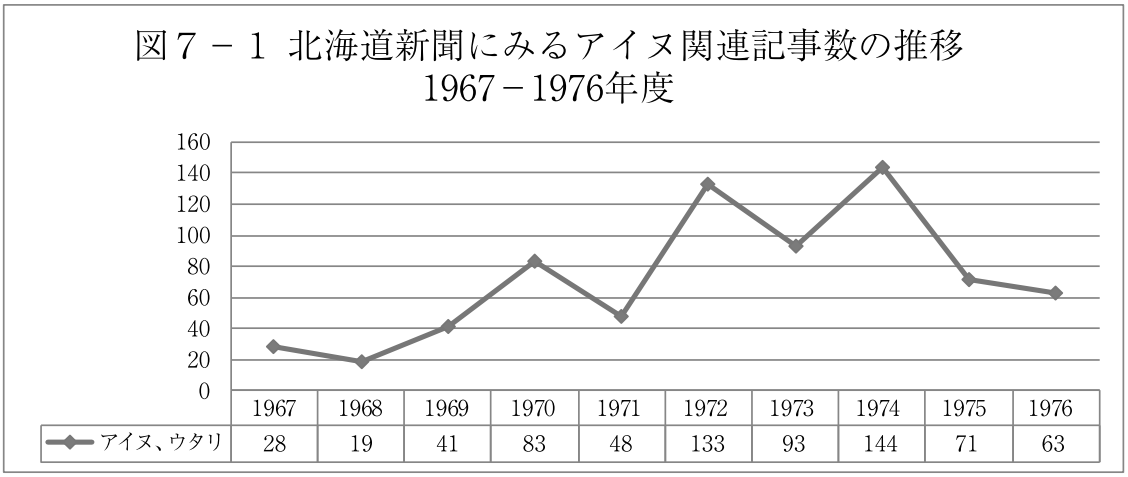
ここで補論として北海道新聞におけるアイヌ関連記事の推移について見てみる。アイヌ民族自身のメディア環境がきわめて脆弱ななかで、アイヌの人たちの多くは、主に新聞やテレビからアイヌ関連の情報を得ていることが明らかになっている。そこで過去のデータを参照しやすい新聞を取り上げて、この間の特徴について見てみる。用いる資料は、1967 ～ 1976 年度の『北海道新聞 縮刷版』と 1989 ～ 2014 年までの「北海道新聞データーベース」で読むことができる記事である[7)]。前者は紙媒体の新聞から記事をピックアップするという作業から得られたデータであり、後者は電子化されたデータから検索したものであるため、データをチェックする精度に差があること、また後者には各地の地方版に掲載された記事も含まれているが、前者には札幌市内版しか含まれていないため、両者を単純には比較することはできない点には留意する必要がある。

第１項　1967 ～ 1976 年度の記事の特徴

図７－１は、『北海道新聞 縮刷版』に 1967 ～ 1976 年度の 10 年間に掲載されたアイヌ関連記事数の推移を示したものである。

まず気づくことは記事の少なさである。とくに 1967 年度は 28 本、1968 年度は 19 本とこの２年間はとくに少なく、当時のアイヌ民族への関心の低さが表れていると見られる。その後、徐々に増えていく傾向があり、とくに 1972 年度と 1974 年度は、それぞれ 133 本、144 本と月に平均 10 ～ 12 本の記事が掲載されていることがわかる。ただし、記事の内容について検討してみると、この２つのピークをなす記事の性格は大きく異なっていることに気づく。

すなわち 1972 年度のピークは連載記事の多さによるものである。表７－８は、各年度の連載記事の掲載状況を示したものである。ここでいう連載とは３回以上のシリーズ物を指している。毎年、「北方領土･歴史をたどる」「アイヌ民族試考」などの連載が組まれているが、とくに 1972 年度は、「アイヌ文学を探る」第二部と第三部、「日曜文芸　マンガ　シャクシャイン」で合わせて計 60 本の記事が掲載されており、この年の記事総数の 45.1％を占めている。明らかにこの連載記事がアイヌ関連記事の総数を押し上げていることがわかる。これらの連載は、アイヌの歴史や文化を丹念に洗い、それを読者の元に届けるという姿勢が表れた記事となっている。この年までは連載以外の単発の記



資料：北海道新聞縮刷版

表７－８　アイヌ関連の連載記事の掲載状況

1967 年度	アイヌ昔話　５回
1969 年度	北方領土　第二部・歴史をたどる　千島の原住民など　９回
1970 年度	アイヌ文学を探る　更科源蔵　51 回
1971 年度	アイヌ民族試考　新たな展開を求めて　12 回
1972 年度	アイヌ文学を探る　第二部　更科源蔵　28 回
	アイヌ文学を探る　第三部　更科源蔵　12 回
	日曜文芸　マンガ　シャクシャイン　作 石森章太郎 20 回
1973 年度	日曜文芸　マンガ　シャクシャイン　作 石森章太郎　５回
	アイヌウタリの周辺　６回
	寄稿　もう一冊のノート アイヌ神謡集を追って　３回
1976 年度	博物館の周辺　二風谷　３回

資料：各年度『北海道新聞縮刷版』
注：連載記事とは３回以上連載された記事をさしている。

事にも同様の傾向が見てとれる。

しかし、1973 年度に入ると連載記事は激減し、1973 年度は 14 本、1974 年度と 1975 年度は０本、1976 年度は３本となる。替わって増えてくるのが社会問題化したアイヌ関連の動きを報道する記事である。２つ目のピークをなす 1974 年度について見ると、この年は、国や道のアイヌ対策として「北海道ウタリ福祉対策」が開始された年であり、それに関する関連省庁の動きや北海道ウタリ協会の対応などの記事が増えている。また、その動きと相前後して、「御用アイヌは去れ　民族資料館にも落書き　白老」（８月１日）、「金田一京助博士の歌碑にパテ、ペンキ塗る　平取　裏側に非難のビラも」（８月５日）、「二銅像に落書き　赤ペンキで“アイヌ独立”　札幌大通公園」（８月 19 日）などの事件が報道されている。さらに、1972 年９月に起きたシャクシャイン像の台座爆破事件以降、爆破・汚損事件が連続して起こり、その実行犯４人の追跡、逮捕、公判に関する記事がこの年の９月から 12 月まで多数取り上げられている。この他にも「アイヌ差別」に関する問題、たとえば、裁判における弁護士による「アイヌは日本人ではないので日本の法律は適応できない」という発言をめぐる問題などの記事の掲載が目立つ。

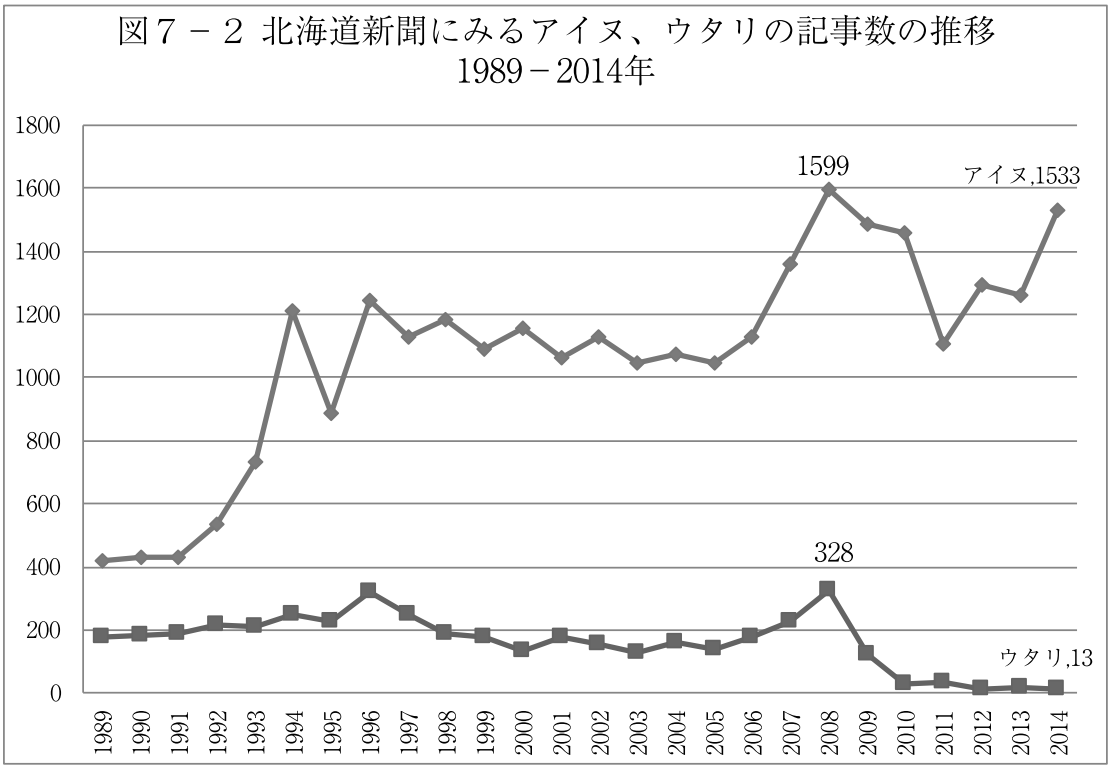
明らかに、1972 年度までとは異なる内容の記事が多数掲載されるようになっている。これは戦前・戦後を通じてくすぶっていた問題が、この時期に顕在化して出てきたことを意味している。ま

た、こうした事件の報道を通して、アイヌ民族に対するマイナスのイメージが世間一般に流布されていったことも容易に想像できる。新ひだか調査において、アイヌの人自身が、「アイヌのことは聞きたくない」「テレビでもアイヌとかウタリとかっていう言葉を聞くとガーンときちゃう」と発言しているが、そういった発言を生み出す要因の１つにこうした事件をめぐる報道の影響があったと考えられる。

第２項　1989 ～ 2014 年の記事の特徴

さて、次に「北海道新聞データーベース」を用いて 1989 年から 2014 年までの記事について見ていくことにする。先に指摘したようにデーターベースの方には各地の地方版の記事も含まれているため記事の数は当然多くなる。

ここでは、「アイヌ」と「ウタリ」の両方をキーワードに検索してみた（図７－２）。北海道アイヌ協会は 1961 年４月 13 日から 2009 年３月 31 日までは北海道ウタリ協会と名乗っていたため 1989 年以降、毎年 200 ～ 300 本程度、ウタリという用語が使われている記事が掲載されている。しかし、2009 年の名称変更以降は激減している。



資料：北海道新聞データベース

一方、アイヌというキーワードが入った記事は確実に増加している。1989 年に 442 本だった記事は、1993 年に 735 本、1994 年に 1,210 本と第１回目の急増期を迎える。さらに 2008 年と 2014 年はそれぞれ 1,599 本、1,533 本と多くなっている。ここではこの３か年の記事の特徴を見てみることにする。

まず、1994 年についてであるが、国際的な動きとして、この年は国連が定めた「国際先住民の 10 年」（1994 年 12 月から 2004 年 12 月）の開始の年であり、毎年８月９日を「国際先住民の日」として

祝うことが決議されたこともありその関連の記事が多くなっている。国内的には「アイヌ民族に関する法律案」（アイヌ新法）制定に向けての動きが具体的になり、早期制定に向けての要請活動などが活発化しており、それに関する記事も多い。さらに、同年７月19日には萱野茂参院選比例代表の繰り上げ当選が決まり、当選から初登庁までの様子や期待などの報道が増えている。こうした国内外の情勢の変化を伝える記事の増加が、全体の総本数の増加につながっている。

ついで2008年に1,599本と歴代最高の記事数となっているが、いうまでもなく、これは同年７月の洞爺湖サミットと同時開催された先住民族サミットの影響である。また、国内的にも、サミット開催に合わせて、６月には衆参両議院において「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が全会一致で採択されている。さらに、アイヌの伝統的生活空間（イオル）の再生事業の具体化や８月には総合的な施策の確立に取り組むため「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」が設置されるなど、アイヌ民族をめぐる様々な動きが活発化しており、それに関する記事も増加している。アイヌ民族に対する風向きが大きく変わったことがこれらの記事からも理解できる。それにともなってアイヌ文化の伝承やアイヌ語の解説など、アイヌ文化や歴史などを紹介する記事も確実に増えてきている。

2014年も1533本と記事の数は多くなっている。ただし、この年は2008年の洞爺湖サミットの記事のように１つの出来事に記事が集中するということはなく、様々な内容が取り上げられる傾向が見られる。北海道が「イランカラプテ・キャンペーン」に取り組むという記事、東京オリンピック開催に向けてアイヌ民族の「象徴空間」を建設するなどアイヌ文化の発信を強める動きを知らせる記事、アイヌ民族遺骨返還問題を扱った記事、さらには札幌市の金子市議の発言をめぐる記事などが目に付くところである。また、2008年同様に、アイヌ民族舞踊、伝統料理、アイヌ刺繍、工芸などアイヌ文化についての特集などが組まれており、新聞社も積極的にアイヌ文化の理解を深める方向で情報発信していることがわかる。

先に「社会がアイヌを受け入れるようになってきている」（女性、40代）という調査対象者の発言を紹介したが、こうした時代の変化をアイヌ民族の人たちも敏感に感じ取っている。調査対象者の回答のなかにも、自信を取り戻しつつあると感じられるものがいくつか存在した。このような状況の変化がどのような影響を、筆者の問題関心に即していえば、アイヌ民族のメディア環境にどのような影響を今後及ぼしていくのであろうか。今後の動きに注目していきたい。

注

1）アイヌタイムズの編集に関しては、上野（2014）の第３章第１節「『アイヌタイムズ』とアイヌ語表現」を参照のこと。

2）増野光教の経歴については、シラリカコタン編集委員会編（2003年）の「増野光教エカシ」（pp.32 － 37）を参照のこと。

3）高木喜久恵の経歴については、前掲シラリカコタン編集委員会編（2003年）の「アイヌ民族文化を伝承に情熱をもやすカッケマッ」（pp.84 － 92）に詳しい。

4）道内のアイヌ語教室の変遷に関しては、前掲上野（2014）の第２章第１節「アイヌ民族とアイヌ語学習」を参照のこと。

5）紙媒体の北海道新聞釧路根室版に「ピアラ」の連載が始まるのは2006年７月である。

6）台湾の先住民族メディアの発展については、林（2008）参照のこと。

7）『北海道新聞 縮刷版』には1967年4月1日の新聞から収録されている。「北海道新聞データーベース」には1988年7月1日の新聞から収録されている。

参考文献

伊藤直哉・八幡耕一, 2004,「先住民族メディアの理論に向けた社会的機能についての考察──関連する国際機関の概観とともに──」『北海道大学大学院国際広報メディア研究科·言語文化紀要』第47号, 1－26.

萱野志朗, 2008,「アイヌ語を伝えるＦＭピパウシ──先住民の立場から──」松浦さと子・小山帥人編著『非営利放送とは何か　市民が創るメディア』ミネルヴァ書房, 103－112.

日本社会教育学会編, 2014,『アイヌ民族・先住民族教育の現在』（日本の社会教育第58集）, 東洋館出版社.

林怡蓉, 2008,「台湾──なぜ非営利放送が求められるのか──」松浦さと子・小山帥人編著『非営利放送とは何か　市民が創るメディア』ミネルヴァ書房, 191－211.

小内純子, 2013a,「サーミ・メディアの展開と現段階」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書29　ノルウェーとスウェーデンのサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院 教育社会学研究室, 146－162.

————, 2013b,「アイヌの先住民族メディアの現段階」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書30　新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 68－77.

————, 2014,「アイヌの人々とメディア環境」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書31　伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 71－82.

————, 2015a,「ノルウェーのサーミ·メディアの現状と利用状況 」小内透編著『調査と社会理論·研究報告書32 ノルウェー・フィンマルク地方におけるサーミの現状』, 123－149.

————, 2015b,「サーミ・メディアとメディア利用の現状」野崎剛毅編著『スウェーデン・サーミの生活と意識──国際郵送調査からみるサーミの教育、差別、民族·政治意識、メディア──』札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科, 71－94.

シラリカコタン編集委員会編, 2003,『シラリカ　コタン──白糠アイヌ文化の継承──』時田岩吉.

上野昌之, 2014,『アイヌ民族の言語復興と歴史教育の研究』風間書房.

八幡耕一, 2005,「オルタナティブ・メディアの情報文化学的考察：アイヌ民族関連ラジオ放送の実態調査を事例として」『情報文化学研究』第4巻, 7－13.

————, 2009,「オルタナティブ・メディアと社会的弱者の可視化」名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化研究叢書』第8号, 169－187.

（小内　純子）